巻　頭　言

臨床心理学部　学部長　濱野　清志

心理社会的支援研究第 8 集を今年度も無事お送りすることができることとなった。今号では、論文 3 篇、報告 5 篇ということであり、しかも、5 篇の報告のうち、3 篇は本学専任教員ではなく、非常勤講師の先生方にも執筆いただき、本学科のオープンに研究の場を持とうとする姿勢がここによく表れているといえるだろう。8 篇のいずれのタイトルを見ていただいても、教育福祉心理学科での学生への教育内容と深くつながり、小学校教員養成、保育・福祉の専門家養成に関わる本学科ならではの教育と研究が融合して形作られた成果として本誌がまとめられていることがよく分かる。

現実の社会環境の中での子どものこころの成長、発達をとらえ、その促進を図ろうとすること、それが心理社会的支援の原点となる姿勢であろう。本学科では、そうであるからこそ、今現実の日本の社会での保育の環境、教育の環境、障がい者を取り巻く環境という制約の中で何ができるのかを問い、そこに関与する自分にできることは何か、をしっかりと把握することができる力を養うことこそ、もっとも基礎においている。

理想的な子どもの成長や発達を語ることはやさしいことである。しかし、この現実の社会の中で、時代の制約、地域の制約、その環境に関わる人々のその都度の関係から生まれる制約、それらをも視野に入れて、そのなかでの子どもたちの成長や発達を支援することはきわめて繊細で、かつ持続力を持ったエネルギーが必要となってくる。

子どもたちにこうあってほしい、このように育ってほしいと願う私たちの理想のイメージが、現実の子どもたちを前に落胆させられ、失望することもときには生じる、それがこういった人間関係を通じた専門職の宿命である。

そのとき、これは子どもたちの努力が足りなかったのだ、子どもたちの能力が足りなかったのだ、あるいは、教育の方法が不十分であったのだ、関わる専門家としての私たちの能力に問題があったのだ、と考え、その対策を取ろうとするのは、この問題を個人の心理的な問題としてのみとらえようとする視点である。こういった個々の人間の資質や能力を適切にアセスメントすることはもちろん重要なことであり、そのうえでその人にとって可能なことを探る、という視点は不可欠である。

しかし、心理社会的に人の行動を捉えようとすることは、その個人の行動が、今私たちがそこに生きている環境としての社会と密接に影響しあったものであるという事実を抜きにして、その個人を単独に捉えることなどできないということでもあるだろう。そうすると、とたんにそれは理想では語りつくすことのできない、やや血なまぐさいものを交えた支援の在り方を模索するということになっていくはずである。

そこに目をそらすことなく、現実にこの世界に生きる生身の人間への支援を模索することが本誌の使命である。それぞれの論考がその任を担うものとなることを願っている。